

昭和五十七年の発足に当って

佐伯史談会長

高木

嘉吉

(佐伯市藤原)

機関誌・佐伯史談の第一三〇号の編集について、巻頭言を求められた。今年の最初の機関誌は、二月に発行する予定であったが、それは羽柴副会長の追悼号にあてたので、年も半ばを経過して発行する本号に巻頭言を載せることになった。間延びした憾があるが、やむをえない次第である。

会の活動は、計画に従って一月五日の新年初歩き、同二十五日の評議員会、二月四日の執行部会、二月二十一日には延岡史談会の佐伯見学の案内、二月二十七日の評議員会、三月八日の研修部会、四月十六日の芹崎半島の自然と文化の見学、五月六日から八日まで二泊三日の薩摩半島の自然と文化の探訪、五月十三日の直川村赤木地区の石造文化財の探訪、五月二十七日の研修部会等休みなく続けられている。

五十六年の年頭所感では、研修のあり方として、

- (一) 足で確かめること
- (二) 日本史の流れに即して郷土の動きを見ること
- (三) エブリーシング・イン・サムシング 一通りの研究を基盤として、ある事について専門的な深い研究をすること
- (四) 温故知新を社会奉仕に生かすこと
- (五) 史蹟・文化財の顕彰に努めること
- (六) 人との「ふれ合い」を大切にするこ

をあげたが、之は本年も我々の活動の指針としたいものである。

第五項にうたったように既存の文化財を保護することは大切なことであるが、そこに止っては保守退嬰たいえいで進歩は望めない。我々は新しい文化財を創造することも手が

けたい。その一環として佐伯独歩会と協同で、城山頂上に独歩文学碑を建設することに取組んでいる。

之は故羽柴副会長が提唱して、独歩の傑作「春の鳥」の舞台となった城山城趾の一角に建碑しようというものである。御寄付下さった皆さんの御好意に対し、一日も早く完成したいとあせりながら、やむをえないいろいろな関係で当初の計画より遅れているが、このほど設計もできあがったので、程なく工事に取りかかる予定である。

「人とのふれ合い」について、もう一度述べてみたい。史談会の研修旅行については、目的地の視察見聞、又途中の風物の観察等それぞれ意義を持ち大切なものである。先般の薩摩半島への旅など、往復した長い日向路は退屈であったかも知れないが、私にとっては少しも退屈しない楽しいものであった。若葉青葉緑したる山野、その山野に残された歴史。

小丸川を渡っては、天正六年大友・島津決戦に於ける大友軍の惨敗を残念がり、名貫川、名貫原、耳川で二万余の大友軍が捕捉せん滅されたことを偲んだ。敵を知り己を知る者は百戦危うからずという。敵を知り己を知つて計をめぐらした名将島津義久に対し、主戦場よりはるか後方の無鹿むしかに居て、戦をよそにキリスト教の法悦ほつやくにひ

たっていた大友宗麟。此の時点で、一は勝つべく、一は敗るべく決定づけられていたとも言える。

こんなことを考えて退屈しない日向路であったが、更に参加会員との「ふれ合い」は一層楽しいものであった。馬齢を重ねて七十九、俺も年とったなと感ずる昨今であるが、年と共に「人とのふれ合い」の大切なことを思う次第である。

三日書を読まざれば心空し、と古人は読書をすゝめてゐる。之を心に銘じて毎日何頁か読んでゐるが、遅々として進まない。しかし少しずつでも読むことで新らしさを保ちたい。

だからだらした記述が続いて相済まないが、御容赦を願いたい。最後に「大学」の湯の盤の銘を引いて結びとする。此の銘の如く会員と共に日々新ならんと念ずるものである。湯の盤の銘に曰く、荀に日に新に、日に日に新に、又日に新なり。

湯は商の湯王 古の聖人

盤は顔を洗う たらい

荀 誠なり マコトにと訓ず

湯王が民を新にする（民をオコス即ち民を鼓舞振起させるため）自らを戒めたものである。日新の語を三度繰り返して、少しも油断すべからざるの意を述べてゐる。